

都城市教育研究所

I	研究主題	5-1
II	主題設定の理由	5-1
III	研究の目的	5-1
IV	研究の仮説	5-1
V	研究の全体構想	5-2
VI	研究の組織	5-2
VII	研究の実際	5-3
1	研究の基本的な考え方	5-3
(1)	言語活動の充実とは	5-3
(2)	言語活動の充実を支える環境づくり	5-3
2	各教科等の特質を踏まえた言語活動	5-3
3	協同的な学習と言語活動	5-3
(1)	協同的な学習とは	5-3
(2)	協同的な学習と言語活動との関連	5-4
4	授業構成の手順	5-4
5	検証授業	5-5
(1)	算数科	5-5
(2)	理科	5-8
(3)	国語科	5-9
VIII	研究の成果と課題	5-10
1	成果	5-10
2	課題	5-10
	《引用・参考文献》	
	《研究同人》	

I 研究主題

思考力・判断力・表現力をはぐくむ授業の展開
～各教科等における言語活動の充実を図る授業の工夫を通して～

II 主題設定の理由

平成20年1月の中央教育審議会答申では、「知識基盤社会」の時代などといわれる社会の構造的な変化の中で、「生きる力」をはぐくむという理念はますます重要になってきていることが述べられている。このような社会では、児童生徒が、自ら考え、判断し、自分のすべきことを決定し、実行できることが求められている。平成18年実施の経済協力開発機構（OECD）による学習到達度調査（PISA調査）においても、日本の児童生徒について、思考力・判断力・表現力を問う読解力や知識・技能を活用する能力に課題があることが明らかになった。

このような中、平成20年3月、学習指導要領が公示され、移行期間を経て、平成23年度より小学校、平成24年度より中学校で完全実施となった。学習指導要領では、学校の教育活動において、基礎的・基本的な知識・技能の習得や思考力・判断力・表現力の育成及び学習習慣の確立等を通して、「確かな学力」を養うとともに、「生きる力」の育成を目指すことが述べられている。その改訂の柱の一つとして、思考力・判断力・表現力を育成する観点から、各教科等における言語活動を充実することが示された。児童生徒の発達の段階や各教科等の系統性を意識し、その特質を踏まえた言語活動を意図的・計画的に行うことにより、各教科等の目標達成に向けた「思考力・判断力・表現力」をはぐくむことが求められている。

本市の児童生徒は、「全国学力・学習状況調査」や「みやざき学力・意識調査」の結果をみると、活用する問題への正答率が低く、小学校では算数科における「理由を問う問題」、中学校では「説明する力を問う問題」に課題があることが分かった。また、「自分の考えを表現すること」を苦手としている児童生徒が多いことも明らかになった。調査結果にみられる「理由を適切に考える」、「説明する」、「自分の考えを表現する」というこれらの課題は、いずれも「言語活動」にかかわるものであり、授業を中心にその充実を図っていくことが、課題解決につながると考える。

以上のことを踏まえ、本研究所では、平成23年度、言語活動の充実を図る授業を通して思考力・判断力・表現力の育成を目指す研究を進め、仮説の確かさを実感した。平成24年度も引き続き、協同的な学習に言語活動を関連付け、その充実を図ることで、思考力・判断力・表現力をはぐくむようにし、各教科等の目標を達成することを目指していく。

このように、実践的な研究を進め、研究の成果を市内の教職員に広めていくことにより、本市の課題の解決に寄与できるのでないかと考え、本主題を設定した。

III 研究の目的

本市の児童生徒の実態を把握した上で、各教科等における思考力・判断力・表現力をはぐくみ各教科等の目標を達成するために、児童生徒の発達の段階や各教科等の特質に応じた言語活動をどのように工夫することが有効なのかを、授業検証を通して究明する。

IV 研究の仮説

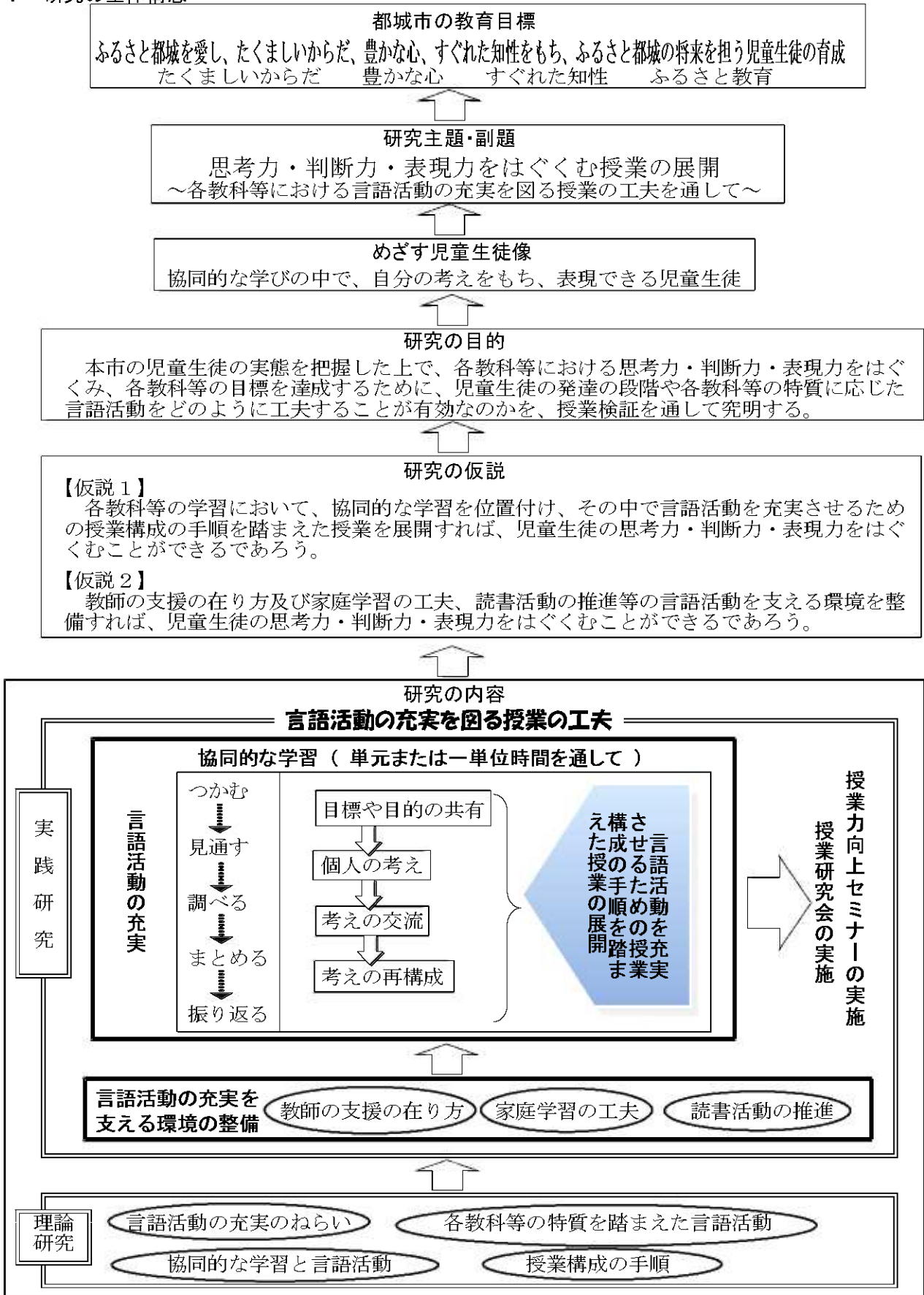
【仮説1】

各教科等の学習において、協同的な学習を位置付け、その中で言語活動を充実させるための授業構成の手順を踏まえた授業を展開すれば、児童生徒の思考力・判断力・表現力をはぐくむことができるであろう。

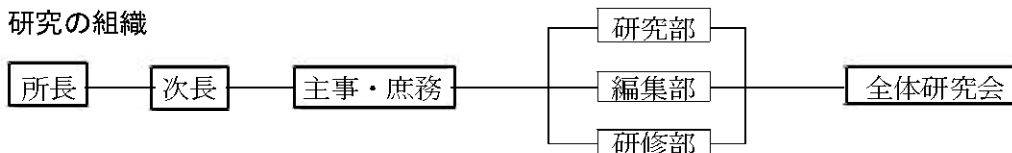
【仮説2】

教師の支援の在り方及び家庭学習の工夫、読書活動の推進等の言語活動を支える環境を整備すれば、児童生徒の思考力・判断力・表現力をはぐくむことができるであろう。

V 研究の全体構想



VI 研究の組織



Ⅶ 研究の実際

1 研究の基本的な考え方

(1) 言語活動の充実とは

言語活動は、言語を話したり書いたり、あるいは聞いて、または読んで、自分の考えを深めたり物事を理解したりする活動である。いわゆる「話す」「聞く」「書く」「読む」という国語科の学習を基にして、あらゆる教科・領域でこれまで行われてきたものである。しかし、知識・理解に重きが置かれた授業が多く、言語活動が充実していたとは言えない状況も見られた。また、これからの学力は、「習得」に終わるのではなく、「活用」する力にまで高めるという見方に転換することが求められている。つまり、授業の中で児童生徒の思考力・判断力・表現力をはぐくむことが必要であると考え。

これらのことから、児童生徒の言語活動が充実している姿を次のようにとらえた。

児童生徒一人一人が思考、判断、表現して活動していること

(2) 言語活動の充実を支える環境の整備

言語活動の充実とは、単に授業の中に、話したり読んだりする活動を取り入れるだけではない。充実を図るためには、まず、各教科等における単元の学習計画に意図的・計画的に言語活動を位置付けていくことが必要である。また、授業の中に考えの交流を位置付け、児童生徒一人一人が思考、判断、表現して活動する時間と機会を保証することが必要である。さらに、言語活動を充実させるためには、児童生徒が考えを自然に、円滑に交流することが望まれる。言語活動の充実を支えるものとして、教師の支援の在り方、家庭学習の工夫、読書活動の推進が考えられる。

教師による言葉かけや言語環境づくりといった教師の支援の在り方を意識して授業に臨むことが、言語活動を支えることにつながる。また、児童生徒の発達の段階に配慮して家庭学習に取り組みせることも、言語活動を支える環境づくりの一つである。さらに、児童生徒の感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにするための読書活動の推進も有効であると考え。このような言語活動の充実を支える環境の整備を行いながら、授業の改善に取り組むことにした。

2 各教科等の特質を踏まえた言語活動

各教科等にはそれぞれ特質があり、その特質を踏まえた指導をしなければならない。言語活動の充実においても、その特質を踏まえることが大切である。

国語科においては、言語活動を通して言語能力を育成し、その他の教科等では、国語科との関連を図りながら、それぞれの特質に留意した言語活動に取り組む必要がある。

各教科等の特質を踏まえた言語活動については、小学校・中学校別に、『小学校学習指導要領』、『中学校学習指導要領』、『言語活動の充実に関する指導事例集（小学校版）』、『言語活動の充実に関する指導事例集（中学校版）』を参考にし、本年度の授業研究の中で取り組んだ。

3 協同的な学習と言語活動

(1) 協同的な学習とは

児童生徒の思考力・判断力・表現力をはぐくむために、単元や一単位時間に、協同的な学習を位置付けることが効果的であると考えた。協同的な学習の定義は次のとおりである。

協同的な学習とは、集団における学習者が、共通の目標や目的をもち、それぞれの考えを基に、お互いの考えを交流させながら、新しい考えを主体的に構成し、課題を解決したり、目標を達成したりしようとする学習活動

協同的な学習は、「目標や目的の共有」→「個人の考え」→「考えの交流」→「考えの再構成」の4つの要素が満たされることによって成立する。個人思考→集団思考→個人思考が原則となる。

(2) 協同的な学習と言語活動との関連

協同的な学習は、「自分の考えを書く」、「考えを交流する」など様々な言語活動と関連している。個人の考えを基に児童生徒相互の学び合いである「考えの交流」を行い、さらに、考えを再構成することにより、個人の思考が深まっていくことを目指している。そこで、協同的な学習の要素に、言語活動を意図的に関連付けることで、指導の効果をより高めていくことができる。と考える。

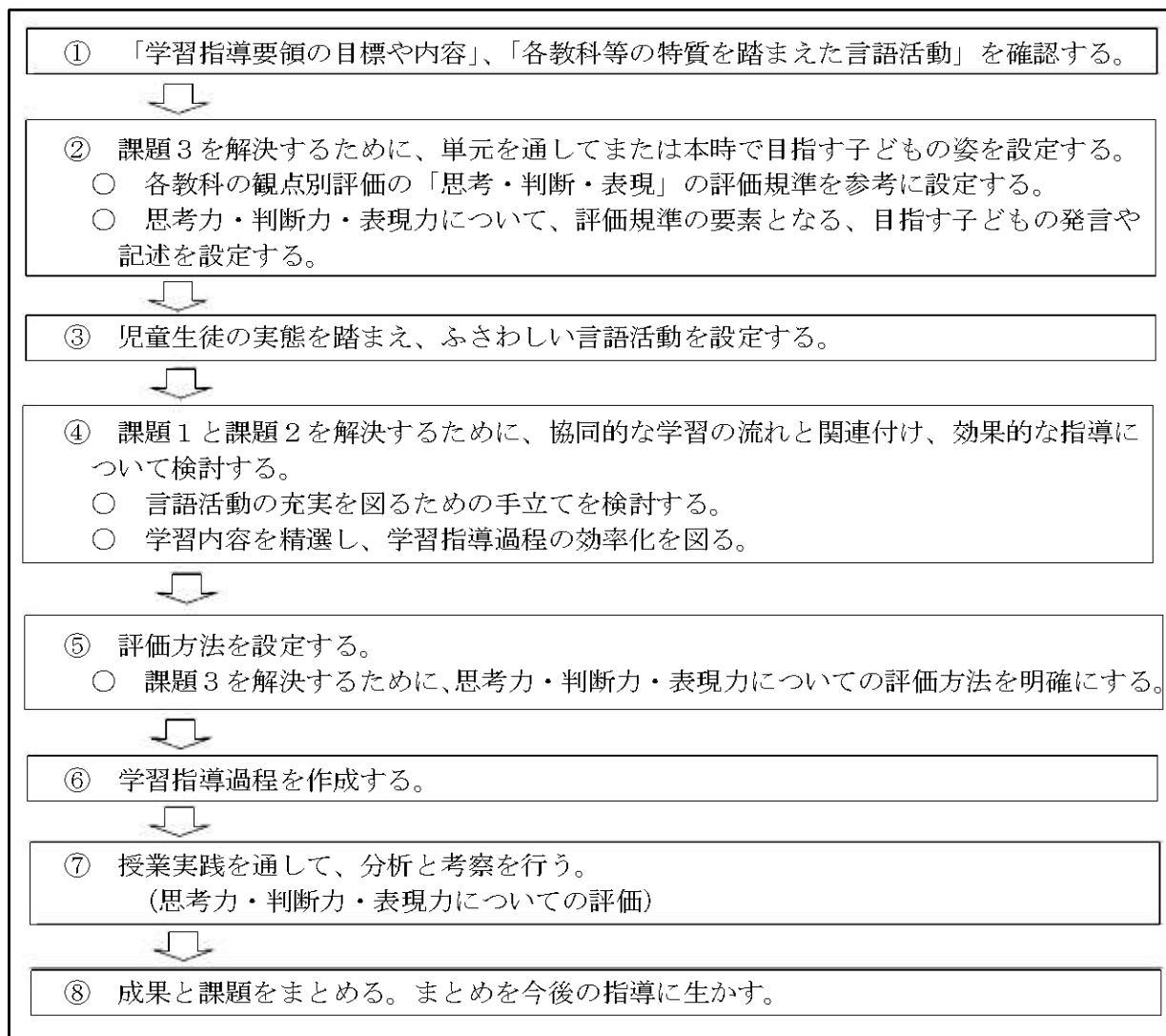


4 授業構成の手順

言語活動の充実を図るために、昨年度、授業構成の手順を作成し、授業の検証を行ったが、課題として、以下の3点について、工夫が必要となった。

- 課題1 言語活動を充実させるための手立てをとると、学習内容や学習活動が授業時間内におさまらない。
- 課題2 言語活動の充実を図るための指導方法が分からない。
- 課題3 どのような力が付いたか曖昧で、評価の内容や方法が分からない。

そこで、本年度は、上記の課題を解決するために、指導や評価のポイントを明確にして、次のような手順で授業構成をしていくことにした。



【資料2 授業構成の手順】

5 検証授業

(1) 算数科（小学校第5学年 単元名「面積」）

ア 授業構成の手順

① 「学習指導要領の目標や内容」、「各教科等の特質を踏まえた言語活動」を確認する。

【学習指導要領の目標や内容】

(目標)

三角形や平行四辺形などの面積及び直方体などの体積を求めることができるようにする。

(内容)

(1) 図形の面積を計算によって求めることができるようにする。

ア 三角形、平行四辺形、ひし形及び台形の面積の求め方を考えること。

【算数的活動】

イ 三角形、平行四辺形、ひし形及び台形の面積の求め方を、具体物を用いたり、言葉、数、式、図を用いたりして考え、説明する活動

【各教科等の特質を踏まえた言語活動：小学校算数科】

○ 言葉や数、式、図、表、グラフなどを適切に用いて考えを分かりやすく説明する。

② 単元を通してまたは本時で目指す子どもの姿を設定する。

- 台形の求積公式を、台形を2つ組み合わせて平行四辺形にする考えを基に、(上底+下底)×高さ÷2であることを説明している。

③ 児童生徒の実態を踏まえ、ふさわしい言語活動を設定する。

- 既習事項を基に台形の面積の求め方を考え、言葉や図、式などを適切に用いて、筋道を立てて分かりやすく説明する。

④ 協同的な学習の流れと関連付け、効果的な指導について検討する。

- 少人数グループで自分の考えを伝え合う場を設定し、説明で足りない言葉を補い合わせることで、考えを深めさせる。
- 全体で考えを発表する場を設定し、言葉や図、式などと関連付けさせながら児童同士に考えをつなぎ合わせたり、復唱させたりすることで、一人一人が筋道を立てて分かりやすく説明できるようにする。
- 台形の求積公式について、ペアでお互いに説明させることで、台形の面積の求積公式の理解を深める。

⑤ 評価方法を設定する。

- ノート記述や発言、観察
 - ・ 三角形や平行四辺形の面積の公式を使って、台形の面積を求めることができるか。
 - ・ 台形の求積公式を理解することができるか。

イ 授業の実際

(7) 本時の目標

- 三角形や平行四辺形の面積の公式を使って台形の面積の求め方を考えることができる。
- 台形の求積公式を理解することができる。

(4) 本時における言語活動

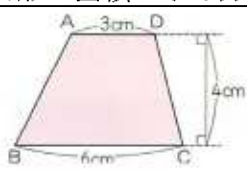

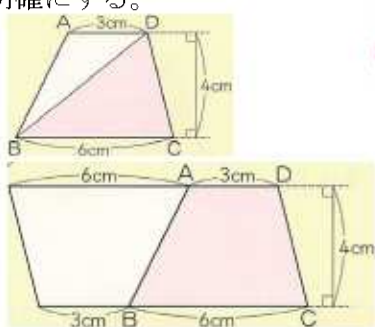


- 既習事項を基に台形の面積の求め方を考え、言葉や図、式などを適切に用いて、筋道を立てて分かりやすく説明する。

(ウ) 授業仮説

- 次のような活動を工夫すれば、児童は既習の面積の求め方に着目して台形の面積の求め方を考え、言葉や図、式などを適切に用いて、自分の考えを筋道立てて分かりやすく説明することができ、公式を理解することができるであろう。
 - ・ 少人数のグループで自分の考えを伝え合う活動
 - ・ 全体で考えを発表する場面で復唱したり、児童同士で言葉をつなぎ合ったりする活動
 - ・ 台形の面積が(上底+下底)×高さ÷2になることを説明する活動

(I) 学習指導過程

※要素…協同的な学習の要素

段階	要素	学習内容及び学習活動	指導上の留意点
つかむ・見通す	目標や目的の共有	<p>1 本時の学習問題を知る。 次の台形の面積の求め方を考えよう。</p>  <p>2 本時のめあてを確認する。 台形の面積の求め方を考えて、説明し、公式にしよう。</p> <p>3 解決の見通しをもつ。 ○ 既習図形の面積の公式 ・三角形 底辺×高さ÷2 ・平行四辺形 底辺×高さ</p>	<p>○ 台形は一組の向かい合った辺が平行であることを確認する。 ○ 児童には、実物大の図をプリントした色画用紙を与え、確かな量感をもつことができるようにする。</p> <p>○ 提示資料を用いて、台形の面積は既習の面積の公式を使って求められるという見通しをもたせる。</p>
調べる	個人の考え	<p>4 自分なりの方法で台形の面積を求める。 ○ 台形の面積を2つの三角形に分割して求める。 ○ 台形を2つ組み合わせて、平行四辺形にして求める。 ○ 台形を横に切って移動して組み合わせた平行四辺形にして求める。 ○ 平行四辺形と三角形に分割して求める。</p> 	<p>○ 図形を分割したり、2つつなげたりして、既に面積の求め方が分かっている図形にして求積できるよう助言する。</p> <p>図を基に自分の考えを整理する活動 ○ 自力解決の難しい児童には、2つの三角形に分けて考える方法の図や2つ合わせて平行四辺形にして考える図を与え、三角形や平行四辺形の公式を使って考えることができないか、児童の考えを引き出しながら助言する。</p>
深める	考えの交流	<p>5 少人数のグループを作り、どのように考えたか説明することで、各自の考えを明確にする。</p>  	<p>考えの交流</p> <p>○ グループ内で考えを伝え合うことで、説明で足りない言葉を補い、式や図を分かりやすく説明できるようにする。グループづくりは教師が支援する。 ○ 言葉だけでなく図と式を関連付けながら説明できるようにする。</p> <p>○ 友だちの参考になる言葉や式は、別の色のペンで書き加えるよう助言し、児童の考えがどのように深まったかを把握する。</p>
		<p>6 全体場で考えを説明し、考えの共通点を見つける。 ○ 2つの三角形に分割する方法 $3 \times 4 \div 2 = 6$ $6 \times 4 \div 2 = 12$ $6 + 12 = 18$</p> <p style="text-align: center;">18 cm^2</p> <p>○ 台形を2つ組み合わせて平行四辺形にする方法 $(3 + 6) \times 4 \div 2 = 18$ 18 cm^2</p> 	<p>考えの交流</p> <p>○ 児童の説明を途中で止め、続きを予想させたり、説明されたことを再現させたりする発問や指示をし、発表する児童だけの時間にならないようにする。</p>
まとめる	考えの再構成	<p>7 台形の面積の求め方をまとめ、公式を考える。 台形の面積は、2つの三角形に分けたり、台形を2つ組み合わせて平行四辺形にしたりして求めることができる。 公式は、 $(\text{上底} + \text{下底}) \times \text{高さ} \div 2$</p>	<p>○ 台形2つを組み合わせた考えの図を取り上げ、「どこの長さが分かれば、面積が求められますか。」という発問で必要な長さを考えさせ、公式を導けるようにする。 ○ 「上底」と「下底」と「高さ」の部分の色分けし、台形における「上</p>

<p>8 台形の公式が $(\text{上底} + \text{下底}) \times \text{高さ} \div 2$ になることを説明する</p> <p>9 台形の面積の公式を用いて練習問題を解く。</p> <p>10 本時の学習を振り返る。</p>	<p>底」「下底」「高さ」の用語を指導する。</p> <p>自分の言葉で求積公式を説明する活動 ○ ペアでお互いに説明させることで確認し、説明が不十分なペアに助言する。</p>
--	---

ウ 授業の分析と考察

(7) 個人の考え（図を基に自分の考えを整理する活動）

図を基に自分の考えを説明する言語活動に向けて、児童から2つの考えを引き出すために教師の行った手だては以下の5つであった。

- ① 説明活動を進める際の話型表として説明カードを掲示した。
- ② 「補助線を引いたり、切って変形したり、移動させたりして、求積できる図形にして面積を求める」という既習事項を確認した。
- ③ 「はさみは使わない」という解決方法を限定する指示を行った。
- ④ 児童の自力解決の際、活用させたい教材・教具として「実物大のマスの入っていない台形」を配付した。
- ⑤ 机間指導の中で、「補助線を引く」「2つの台形を合わせる」ということを示唆した。



【資料3 ペアで自分の考えを説明する児童】

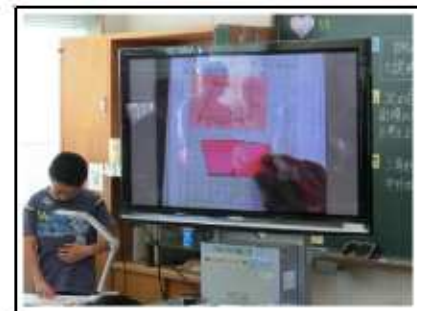
以上の手だてを講ずることで、一人一人に自分なりの考えをもたせることができた。実際の活動場面では、説明カードを手がかりに、児童は自分のノートを指し示しながら、筋道を立てて説明することができていた。また、この活動を通して、友だちの説明を聞く中で自分の間違いに気付き、考えを再構成する児童の姿も見ることができた。説明の場に適切な資料があり、それをうまく使いながら説明することで、充実した言語活動を展開することができた。

(4) 考えの交流

考えの交流においては、効率よく進めていくために、発表児童には実物投影機で自分のノートをテレビ画面に映して発表させた。

また、発表の際は、途中で説明を止め、その続きを他の児童に予想させることで、充実した言語活動とすることができた。

発表を終えた後も、児童の理解度を確認するために、ペアで説明を再現させることで小刻みな評価を行い、確実に学習内容を理解させることができた。



【資料4 全体場でノートを指し示しながら説明する児童】

(5) 考えの再構成（自分の言葉で求積公式を説明する活動）

ここでは、はじめに求積公式にまとめ、次にその求積公式の意味を説明させる活動を設定した。台形の求積公式にまとめていく活動では、「台形2つをあわせて平行四辺形にする考え方」を取り上げて、「上底」「下底」「高さ」の新出用語を教え、必要な長さを考えさせながらまとめていくことができた。

その後のペアで「なぜ、台形の公式が『 $(\text{上底} + \text{下底}) \times \text{高さ} \div 2$ 』となるのか』について説明し合う活動では、図が用意されていなかったために、児童が説明に窮する姿が見られ、説明とノートなどの資料との関係の重要性を再確認することができた。

エ 成果と課題

- 学び方・学習訓練の定着により、つかむ・見通す段階における指導をスムーズに進めていくことができた。これにより、十分に言語活動の時間を確保することができた。
- 自力解決場面で十分に自分の考えをもたせておくことが、その後の考えの交流などの言語活動の充実につながるということが分かった。
- 自分の考えを構築していく上で、協同的な学びの手法を取り入れることが児童相互の学び合いの中で、よりよい考えへと導いていくことにつながった。
- ペアの説明活動の中では、説明する場と適切な資料がそろると、それに応じた言葉を使って説明でき、言語活動が充実することが分かった。
- 自分の考えを説明する場面において、ただ説明させるのではなく、途中で説明を止め、続きを聞き手である児童に予想させる活動を仕組むことで、充実した言語活動を実現することができた。
- ねらいに向けて必要な言語活動を行う時間を十分に確保していくためには、より深い教材研究を行い、何を考えさせていくべきかを明確にした授業づくりを進めていく必要がある。

(2) 理科

ア 理科における言語活動

- 予想や仮説を立てる場面では、問題に対する考えを記述したり、児童生徒相互の話合いを適宜行ったりすることにより、条件に着目して自分の考えを明確にする学習活動を充実させる。
- 観察・実験の結果を整理し考察する場面では、結果を予想や仮説と関係付け、考察を言語化し、表現する学習活動を充実させる。

イ 授業の実際（第9学年 ※中学校第3学年 単元名「化学変化とイオン」）

(7) 本時の目標

- 水溶液が中性になるときの濃度や体積について、イオンのモデルを使って考え、説明することで、水素イオンと水酸化物イオンの量的関係を見いだすことができる。

(4) 本時における言語活動

- 実験結果から分かったことを、「水素イオン」「水酸化物イオン」という科学的な言葉を使って、自分の考えをイオンのモデルと関係付けて説明する。

(4) 言語活動を充実させるための手立て

協同的な学習の要素	学 習 活 動
個人の考え (自分の考えを整理する活動)	<ul style="list-style-type: none">○ 実験結果から分かるイオンの様子をモデルを用いて可視化させて考えを整理させる。○ 根拠と結論を自分の言葉でまとめることを伝える。
考えの交流	<ul style="list-style-type: none">○ 2～3人のグループでイオンのモデルを使いながら、互いの考えを伝え合い、自分の考えを深めさせる。
考えの再構成 (自分の言葉で考察をまとめる活動)	<ul style="list-style-type: none">○ 考察を「水素イオン」「水酸化物イオン」という科学的な言葉を使って、自分の考えを文章でまとめさせる。

ウ 授業の分析と考察

(7) 個人の考え（自分の考えを整理する活動）

個人の考えを整理する活動では、イオンのモデルを動かしながら、一人一人可視化をさせたことにより、根拠と結論を整理して自分の考えをまとめていた。イオンのモデルは、実験結果を考察し、それを表現するための資料として大変効果的であった。



【資料5 可視化された考えをグループで説明している場面】

(4) 考えの交流

次に、2～3人のグループで、考えの交流をさせた。互いにイオンのモデルを使って相手に説明し合うことで自分の考えを深めたり確認したりすることをねらった。ある生徒が、自分の考えを説明しながら、「中和しませんね・・・。」と、自分の考えのつまずきに気づき、そこで修正しながら説明していたことから、考えの交流で生徒の思考が深まったことが確認できた。自分の考えを再構成することにつながったと言える。また、グループのメンバーや教師の聞く姿勢や温かい雰囲気が、考えの交流のよさにつながっていることが分かった。

(4) 考えの再構成（自分の言葉で考察をまとめる活動）

考えの交流の後、考察を文章でまとめさせた。ここは、自分の考えを再構成する場面である。生徒の記述から、実験の考察をイオンのモデルを使って可視化させたことや、考えの交流で自分の考えを確認したり気付いたりしたこと等を基に、自分の考えを再構成して、「水素イオン」「水酸化物イオン」という科学的な言葉を使って総合的にまとめることができたと考える。

協同的な学習に言語活動を関連付けたことが、言語活動を充実を図ることになり、本時で目指す子どもの姿を達成できたと考える。言語活動の充実を図ることが、生徒の思考力・判断力・表現力をはぐくむことにつながったと言える。

エ 成果と課題

- 目に見えないイオンをモデルを使って可視化させたことにより、水酸化物イオンと水素イオンが同比率（1：1）で中和するということの理解を深めることができた。
- 協同的な学習の流れに沿って考察を考えていくことは、生徒の思考力・判断力・表現力をはぐくむことにつながることが実証できた。
- 言語活動の充実を図るためには、授業のスリム化が必要である。イオンのモデルや黒板の確保等の工夫を行ったことは、言語活動の充実のための工夫として有効だった。
- 実験の考察を自分の言葉で説明するためには、予想の段階で生徒自身に見通しをしっかりとたせておくことが必要である。

(3) 国語科

ア 国語科における言語活動

- 日常生活に必要とされる記録、説明、報告、紹介、感想、討論などの言語活動を行う能力を確実に身に付けることができるようにし、相互に思考を深めたりまとめたりしながら解決していく能力の育成を重視する。
- 自ら学び、課題を解決していくための学習過程を明確化し、単元を貫く言語活動を位置付けることが必要である。

イ 授業の実際（小学校第2学年 単元名「どうぶつのひみつをみんなでさぐろう」）

(7) 本時の目標

- 安全な巣を作って暮らすビーバーの知恵を読み取ることができる。

(4) 本時における言語活動

- 本時学習範囲の中から安全な巣を作って暮らすビーバーの知恵を的確に読み取り、ビーバーの巣のひみつをクイズにする。

(5) 言語活動を充実させるための手立て

協同的な学習の要素	学 習 活 動
個人の考え (自分の考えを整理する活動)	○ 読み取ったことをもとに、ビーバーの巣に関するクイズを個人で作る。
考えの交流	○ 4人のグループで自分で作ったクイズを出し合い、互いの考えを伝え合い、自分の考えを深めさせる。
考えの再構成 (クイズを見直して作る活動)	○ グループや全体での話し合いを基に、大事な言葉などが入っているクイズや答え、解説を修正する。

ウ 授業の分析と考察

本単元では文章中にある大事な言葉や文を使って「どうぶつのひみつクイズ」を作るということをもとに、単元を貫く言語活動として設定し、本時はその4時間目であった。「前時の復習」、「音読」、「サイドラインを引く」、「クイズ作り」、「考えの交流」、「発表」、という活動を45分の中にもどのように収めるかが、当初より課題として挙がっていた。そこで、学習の効率化を図るための手立ての一つとして、授業前に予め本時の学習範囲にあたる教材文をコピーして、ノートに貼らせておいた。そのため、児童は学習内容の読み取りに集中することができた。

(7) 個人の考え（自分の考えを整理する活動）

動物のひみつクイズを作る場面では、サイドラインを引いて読み取った文章を基に付箋紙にクイズを書く活動を設定した。その際、クイズの答えだけではなく、その根拠まで文章を基に考えさせた。そうすることで、主体的に教材文を読み込ませることにつながるからである。実際に、児童の中にはクイズとその答えだけでなく、その解説を「～ためです。」「～だからです。」という文末表現を使って書いている児童が見られた。しかし、作業の時間が短く、クイズを完成させることができない児童もおり、時間配分や個に応じた支援の在り方に課題も残った。

(4) 考えの交流

考えの交流の場面では、自分の考えを深めさせることをねらって自分の作ったクイズを出し合い、互いに考えを伝え合わせる活動を設定した。その際、自分と友達の考えの相違点に着目させた。自分ではクイズを作ることができなかった児童も友達のクイズを参考にして、クイズを作ることができた。このことから、交流を通して児童相互の学び合いができていたと考える。



【資料6 クイズ作りでの教師による支援】

(5) 考えの再構成（クイズを見直して作る活動）

考えの再構成の場面では、グループや全体での交流を基に、クイズや答え、解説に教材文の大事な言葉や文が使われているのか修正させることで、思考の深まりをねらった。読み取ったことや交流したことを基に、クイズ等を修正したり書き加えたりしている児童がいた。このことから、考えの再構成が児童の思考を深めることに有効だったと考える。しかし、時間が足りず、全体で修正した内容を確認することができなかったのが課題として残った。

本単元の学習と並行して、子どもたちに動物に関する別の本を読書させた。そして、本時以後の授業ではその本の中から大事な言葉や文を探し、「どうぶつのひみつクイズ」を作る活動を行ったが、これまでの学習の成果があり、子どもたちはスムーズにクイズ作りをすることができた。並行読書の有効性を検証することができた。

エ 成果と課題

- 単元を貫く言語活動として、「どうぶつのひみつクイズ」作りを設定したことで、児童は、主体的に学習に取り組み、大事な言葉や文を見つけることができた。
- ノートや付箋紙や実物投影機などを効果的に活用し、効率的に授業を進めることができた。
- 一人でクイズを作ることができなかった児童に対する支援を行う時間の確保が必要である。
- 読み取る視点だけでなく、クイズを作る視点を与えておくことも必要であった。

VIII 研究の成果と課題

1 成果

- 各教科等の授業において、目指す子どもの姿を明確にし、協同的な学習の流れを基に授業を構成したことで、ねらいを達成するにふさわしい言語活動を位置付けることができ、児童生徒の思考が深まった。
- 思考力・判断力・表現力の評価を検討し、授業の効率化を考慮した授業構成の手順を明らかにしたことで、一人一人の言語活動が充実し、一部の児童生徒だけでなく、全員参加の授業を展開することができ、思考力・判断力・表現力が高まった。
- 教師による言葉かけなどの教師の支援や読書活動の推進、家庭学習の充実といった言語環境を整備することが効率的な授業につながり、児童生徒が考えを交流したり表現したりすることができた。
- 授業力向上セミナーや公開検証授業研究会に市内の多くの先生方に参加していただき、言語活動の充実について協議をしたことで、研究所の研究を還元することができた。

2 課題

- 思考力・判断力・表現力の評価の在り方について、手段や方法を整理する必要がある。
- 言語活動を支える「教師の支援の在り方」、「家庭学習の工夫」、「読書活動の推進」について、研究所として一例を示し、広げていく必要がある。

《引用・参考文献》

- 文部科学省(2008. 3)「小学校学習指導要領」 東洋館出版社
 文部科学省(2008. 8)「中学校学習指導要領」 ぎょうせい
 文部科学省(2010. 12)「言語活動の充実に関する指導事例集 小学校版」
 文部科学省(2011. 5)「言語活動の充実に関する指導事例集 中学校版」
 文部科学省(2008. 3)「小学校学習指導要領解説 国語編」 東洋館出版社
 文部科学省(2008. 3)「小学校学習指導要領解説 算数編」 東洋館出版社
 文部科学省(2008. 12)「中学校学習指導要領解説 理科編」 日本文教出版
 高木展郎編(2008. 11)「各教科等における言語活動の充実」 教育開発研究所
 水戸部修治編(2011. 3)「言語活動モデル事例集」 教育開発研究所
 文部科学省(2011. 6)「初等教育資料」 東洋館出版社
 日本教育評価研究会(2009. 7)「指導と評価」 図書文化

《研究同人》

都城市教育研究所所長	福元 富士雄	都城市立五十市小学校	柚木崎 誠
都城市教育研究所次長	清水 健史	都城市立明和小学校	米澤 雄志郎
都城市教育研究所主事	後藤 世志哉	都城市立明道小学校	下石 暢彦
都城市教育研究所主事	日高 亘	都城市立沖水小学校	中島 寛
都城市教育研究所主事	多良 久	都城市立中郷中学校	永田 圭子
都城市教育研究所主事	川島 博嗣	都城市立麓小学校	森木 奈緒美
都城市教育研究所主事	国生 尚	都城市立富吉小学校	佐野 誠
都城市教育研究所主事	永富 雅樹	都城市立祝吉小学校	比江嶋 哲
都城市教育研究所庶務	小岩屋 美香	都城市立梅北小学校	大曲 真也
		都城市立笛水小中学校	大峯 隆史